

# 青年期における アタッチメントスタイルと対人認知

——交際期間の違う恋人の応答性の認知——

岡島 泰三・桂田恵美子

Bowlby (1969/1982) は、養育者と乳児との関係を、乳児が不安や恐怖、ストレスを感じた際に養育者へ接近を求めるかどうかというアタッチメントという概念で説明した。養育者に接近、接触すること（アタッチメント行動）で、不安や恐怖、ストレスを感じていた乳児は安全感（*felt security*）を得ることができ、安全感を得た子どもは、また養育者から離れ探索できるようになる。前者のように、不安や恐怖、ストレスを感じた乳児が安全感を得るために用いられる養育者を安全の避難所（*a haven of safety*）、後者のように、安全感を得た乳児が探索の拠点とする際に用いられる養育者を安全の基地（*secure base*）と言う。この乳児期の養育者－乳児関係によって、その後の対人的な情報を処理する際の鋳型となる内的作業モデルを内在化させる（Bowlby 1969/1982, 1973, 1980）。乳児が安全の避難所や安全の基地として養育者を用いることができた場合、乳児は他者が自分に応じてくれるというような安定した内的作業モデルを形成する。一方、乳児が養育者を安全の避難所や安全の基地として用いることができなかつたり、その利用可能性に一貫性を欠いている場合、乳児は他者が自分に応じてくれなかつたり、その確信を持てないというような不安定な内的作業モデルを形成する。

Hazan & Shaver (1987) は、上述の Bowlby の理論を青年期のアタッチメントに発展させ、乳幼児のアタッチメントを分類するストレンジシチュエーション法（Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978）に対応する 3 つのア

タッチメントスタイル（安定型、回避型、アンビバレント型）に個人を分類する質問紙を開発した。この質問紙の開発の後、この質問紙を基にして多くの得点化された尺度が作成された（例えば、**Experienced in Close Relationship ; Brennan, Clark, & Shaver, 1998**）。そして、多くの尺度が開発されたことにより、青年・成人期のアタッチメントスタイルと対人的行動、精神的健康、情報処理など、さまざまな関連が示されるようになった（詳細は **Mikulincer & Shaver, 2007** 参照）。例えば、**Mikulincer, Florian, & Weller (1993)** は、湾岸戦争というストレス下において、個人の行動がアタッチメントスタイルによって異なることを示している。このような違いは、乳幼児期に内在化された内的作業モデルを反映していると考えられている。

乳幼児期におけるアタッチメント研究では、アタッチメント人物である養育者と乳児との関係性に焦点を当てて行われている（e.g., **Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978**）ように、青年・成人期のアタッチメント研究もアタッチメント人物との関係性に焦点を当てた研究が多く行われてきた。例えば、**Simpson, Rholes, & Nelligan (1992)** は、実験室に来訪したカップルの女性に不安を与えた後、そのカップルがどのような行動を示すかということを観察した。安定型傾向が高い人は、回避型傾向が高い人に比べて、サポート要求行動やサポート提供行動が多く現れることを示した。**Simpson** らの手続きを用いた我が国の研究においても、若尾（2004）は、不安を与えられる前である分離前の行動では、アタッチメントスタイルの違いが現れなかったが、不安を与えられた分離再会場面の行動では、安定型傾向が高い人はアタッチメント行動が現れることが多く、回避型傾向が高い人とアンビバレント型傾向が高い人はアタッチメント行動が現れることが少ないことを示した。

このように、乳幼児期と同様に、個人は青年期においてもアタッチメント人物に対してアタッチメント行動を現すことが示されている。しかし、これらの研究では、アタッチメント人物との関係性を表したものかそれ以前の発達段階において内在化された内的作業モデルによるものかは明らかにされていない。**Zeifman & Hazan (2000)** は、恋人がアタッチメント人物になるまでには、

乳児期と同様に4つの段階があるとしている。第1段階は、“ブレ・アタッチメント”の段階である。この段階の特徴は、無差別な人物へのシグナル（泣く、見つめる、微笑する、声を出すなど）を送ること、社会的相互作用の準備性などが挙げられる。第2段階は、二人が恋に落ちたときに訪れる“アタッチメントの形成”の段階である。それまでの段階で無差別な人物に送っていたシグナルを選択的に送るようになる。さらに、この段階では、お互いにさまざまな個人的な情報を自己開示するようになる。第3段階は、“明瞭なアタッチメント”の段階である。この段階では、第2段階までに行われていたシグナルを送ることや個人的な情報を開示することなどの行動は減少するようになる。さらに、この段階では、恋人といることでの興奮が減少していき、それに変わって安心感や信頼感が増し、恋人との分離によって分離苦悩が現れるようになってくる。第4段階である“目的修正的パートナーシップ”の段階は、恋人との会話はより表面的なものになり、見つめ合いや身体接触の頻度や長さは極端に減っていく。さらに、互いの関係以外のものに注意を向け、刺激を求め出す。

この Zeifman & Hazan (2000) のモデルに従うと、第2段階は、お互いについての明確な情報がないため、それぞれが情報提供、および、情報収集を行っていると思われる。この不完全な恋人に関する情報を個人は何らかの手段で埋めなければいけないだろう。そこで、それ以前に内在化されている内的作業モデルはそのような不完全な情報を埋めることに役立つのではないと思われる。さらに、個人は内的作業モデルに最も適した環境を事前を選択するようになるということ (Bowlby, 1980) から、内的作業モデルと合う人物を交際相手として選択するのではないかと考えられる。第3段階では、前段階までの個人的な情報のやり取りは少なくなり、より完全な（実際の）恋人情報を保持するようになると考えられる。すなわち、この段階では、内的作業モデルを用いるよりも現実的な情報処理を行うのではないかと考えられる。第4段階では、現在の恋人に関する情報の収集や自分の情報の提供が少なくなる。このため、個人的な情報は再び不確かなものになり、その不確かさを埋めるために

再び内的作業モデルに依拠した対人認知を行うかもしれない。また、この段階では、恋人が新たなアタッチメント人物と同定されるようになってくる。**Hazan & Zeifman (1994)** は、**Bowlby (1969/1982)** がアタッチメントを定義する際に用いた相互に関連する 4 つの行動分類（安全の避難所、安全の基地、近接性維持、分離苦悩）を行う人物、すなわち、アタッチメント人物が、恋人として 2 年間の交際期間を持つことで母親から恋人へと移行することを示した。このような新たなアタッチメント関係が成立する過程において、個人はそれ以前の内的作業モデルと適合しない場合、そのような関係を解消するか、もしくは、自らの内的作業モデルを変化させることで環境との適応をはかるだろう（**Bowlby, 1980**）。すなわち、交際期間が 2 年以降では新たなアタッチメント関係に応じたモデルが個人の対人関係の認知に影響を及ぼすのではないかと考えられる。

以上のことから、交際期間が短いときには、個人は自らの内的作業モデルに合った人を恋人として選択しているため、個人のアタッチメントスタイルと恋人に関する認知との間には関連があると考えられる。また、2 年以上交際を継続している個人も同様に、新たなアタッチメント関係に適合する内的作業モデルに変化させているために、個人のアタッチメントスタイルと恋人に関する認知との間には関連があると考えられる。

そこで、本研究では、青年期のアタッチメント人物である恋人に対して、交際期間による対人情報の処理の違いが生じるかを検証する。交際期間が短いときには、それ以前の内的作業モデルを用いているため、安定型の人は、恋人が応答的であると認知し、不安定型である回避型やアンビバレント型は恋人が応答を回避・拒絶していると認知するだろう。また、交際期間が 2 年以上続いている場合には、恋人に関する情報に適合するように内的作業モデルを変化させているため、交際期間が短いときと同様の結果が生じると予測される。しかし、交際期間がその中間である場合は、現実の情報に基づく対人認知を行っているため、このような傾向は生じなくなると思われる。

## 方 法

### 対象者と手続き

本研究では、現在交際中の異性がいる大阪・兵庫の大学生およびそれに相当する年齢の専門学校生 287 名に質問紙と返信用封筒が入った封筒を配布した。この封筒は 2 通が 1 セットになっており、一方の封筒を現在交際している異性に手渡すように回答者に依頼した。これらの質問紙への回答は、それぞれ独自で行い、お互いの回答は見せ合わないようにすること、また、それぞれ独自に郵送するように依頼した。この 574 名分の質問紙のうち 158 名（男性 69 名、女性 89 名）が回答し、返信してくれた（回収率 27.9%）。本研究では、カップルの両者が返信を行ったかどうかということには関わらず、交際中と明記した個人を分析の対象とした。回答者の平均年齢は 20.6 歳（SD = 2.93）であった。平均交際期間は 15.0 ヶ月（範囲 13 日 - 33 ヶ月、SD = 17.58 ヶ月）であった。質問紙には、アタッチメントスタイル、恋人の応答の認知、属性と恋愛関係に関する項目が含まれていた。

### 質問紙

**アタッチメントスタイル** アタッチメントスタイルを測定するために本研究では、**Experienced in Close Relationship (ECR: Brennan, et. al., 1998)**を使用した。ECR は、一般的に恋愛パートナーに対してどのように振る舞うかという信念に基づいて、アタッチメントを測定するものであり、2 つの下位尺度（親密性の回避尺度 18 項目と、見捨てられ不安尺度 18 項目、合計 36 項目）から構成されている。親密性の回避尺度は安定型 - 回避型を弁別する尺度であり、見捨てられ不安尺度は、アンビバレント型 - 非アンビバレント型を弁別する尺度である。本邦においては、中尾・加藤（2004）が ECR の信頼性、妥当性を検討している。彼らの研究では、いくつかの項目が削除されているが、本研究で再度、因子分析を行った結果、**Brennan et al. (1998)** のオリジ

ナルと同様の結果が生じたので、本研究では、オリジナルと同様の 36 項目を採用した。親密性の回避尺度の項目例は“私は恋人に心を開くのに抵抗を感じる”や“私は恋人とあまり親密にならないようにしている”である。見捨てられ不安尺度の項目例は、“私は恋人を失うのではないかと結構心配している”や“私が恋人のことを大切に思うほどには、恋人は私のことを大切に思っていないのではないかと心配する”である。回答は「全く当てはまらない」(1点)から「非常に当てはまる」(7点)の 7 段階評定で行った (1~7 点)。本研究での信頼性係数は親密性の回避尺度で  $\alpha = .82$ , 見捨てられ不安尺度で  $\alpha = .86$  であった。

**恋人の応答性の認知** 自分が提示したコミュニケーションシグナルに対して恋人がどのように応答したと認知するかを測定するために、岡島 (2006) が作成した恋人の反応性認知尺度を用いた。恋人の反応性認知尺度は日常生活において大学生が恋人と行っているコミュニケーションについて、自分が投げかけたシグナルに対して恋人が応答的-回避的な応答を行うという一元性で測定するために作成されたものである。恋人の反応性認知尺度は 9 項目からなり、項目例は“恋人は私が話しているときに (目を見ない/目を見る)”や“恋人は私からの電話に (出ない/必ず出る)”である。回答は意味的に対立するような語を 1 点と 7 点に配置した 7 段階評定からなり (1~7 点), 得点が高いほどポジティブに応答的であると認知したことを示すものであった。本研究での信頼性係数は  $\alpha = .70$  であった。

**属性と恋愛関係に関する項目** 回答者は、年齢、性別、交際期間を記述した。

## 結 果

### アタッチメントスタイルの分類

オリジナルの ECR (Brennan et al., 1998) の分類法に基づき、回答者は、ECR の親密性の回避得点と見捨てられ不安得点を用いた Ward 法によるクラスター分析によって 3 つのアタッチメントスタイル (安定型, 回避型, アンビバレント型) に分類された。安定型に分類された回答者は 58 名 (男性 30 名, 女性 28 名), 回避型は 35 名 (男性 13 名, 女性 22 名), アンビバレント型は 65 名 (男性 26 名, 女性 39 名) だった。本研究では、アタッチメントスタイル, および、恋人の反応性認知尺度に性差がなかったことから、その後の分析は性差を考慮に入れず行った。

### 交際期間毎の分類

最初に交際期間が 2 年以上の人を弁別し、その回答者の人数になるべく近づくように、便宜的に残りの交際期間を 3 分割した (現在の交際期間が同じ回答者がいるため、期間毎の回答者の数に少しのばらつきが生じている)。第 1 期間 (交際期間が 0 ヶ月から 5 ヶ月) の回答者は 41 名 (安定型 10 名, 回避型 14 名, アンビバレント型 17 名), 第 2 期間 (交際期間が 6 ヶ月から 11 ヶ月) の回答者は 40 名 (安定型 14 名, 回避型 8 名, アンビバレント型 18 名), 第 3 期間 (交際期間が 12 ヶ月から 23 ヶ月) の回答者は 40 名 (安定型 17 名, 回避型 8 名, アンビバレント型 15 名), 第 4 期間 (交際期間が 24 ヶ月以上) の回答者は 37 名 (安定型 17 名, 回避型 5 名, アンビバレント型 15 名) であった。

### 各期間のアタッチメントスタイルにおける恋人の応答性の認知

第 1 期間の恋人の応答性の認知がアタッチメントスタイルによって異なるかを検証するために、アタッチメントスタイルを独立変数、恋人の応答性の認

Table 1 各交際期間の恋人の応答性の認知得点 (SD)

	安定型	回避型	アンビバレント型	F 値
第 1 期間	58.4 <sub>b</sub> (4.86)	54.0 <sub>a</sub> (4.11)	57.5 <sub>ab</sub> (5.11)	2.89 <sup>†</sup>
第 2 期間	56.1 (4.57)	53.1 (6.82)	53.4 (7.75)	0.84
第 3 期間	56.8 (4.28)	52.8 (7.44)	55.4 (4.63)	1.66
第 4 期間	56.5 <sub>b</sub> (7.86)	49.4 <sub>a</sub> (7.37)	50.0 <sub>a</sub> (6.87)	3.48*

注：同じアルファベットは多重比較で同じグループに所属することを示す。

<sup>†</sup> $p < .10$  \* $p < .05$

知を従属変数とした一元配置の分散分析を行った。その結果、アタッチメントスタイルの主効果の傾向が認められた、 $F(2, 38) = 2.89, p < .10$ 。Tukey を用いた多重比較の結果、回避型 ( $M = 54.0, SD = 4.11$ ) は安定型 ( $M = 58.4, SD = 4.86$ ) より恋人の応答性を拒絶／回避的に認知する傾向があった (Table 1 参照)。

第 2 期間、第 3 期間、第 4 期間についても、第 1 期間と同様の分析を行った。その結果、第 2 期間、第 3 期間では、アタッチメントスタイルの主効果は認められなかった。しかし、第 4 期間では、アタッチメントスタイルの主効果が認められた、 $F(2, 35) = 3.62, p < .05$ 。Tukey を用いた多重比較の結果、回避型 ( $M = 49.4, SD = 7.37$ ) とアンビバレント型 ( $M = 50.0, SD = 6.87$ ) は安定型 ( $M = 56.5, SD = 7.86$ ) より拒絶／回避的に恋人の応答性を認知した (Table 1 参照)。

考 察

交際初期にはまだ情報がなかったために、内的作業モデルを用いた対人認知を行うこと、交際期間が長くなるにつれて内的作業モデルを用いた対人認知を行わないようになること、さらに、交際相手がアタッチメント人物となる 2 年以上では再度内的作業モデルを用いるようになることを検証するために、本研究では、交際期間ごとにアタッチメントスタイルと恋人の応答性の認知との関連



を検証した。予測通り、交際初期（交際開始から5ヶ月以内）の恋人の応答性の認知に関して、アタッチメントスタイルによる違いの傾向が示された。安定型の人、回避型の人より恋人の応答性をポジティブに認知する傾向にあった。アタッチメント関係が成立していないと考えられるこの時期では、恋人に対する確たる情報がまだないため、それ以前に内在化していた自分自身の内的作業モデルに基づいて、恋人の応答性を認知していたのではないかと考えられる。この時期は、**Zeifman & Hazan (2000)** が提唱しているアタッチメント形成プロセスの第2段階である“アタッチメント形成”の段階と考えられる。乳児期の親に対する行動と同様に、この段階での個人は恋人に対して選択的に社会的シグナル（例えば、微笑む、見つめる、声を出す、泣くなど）を送るようになる。さらに、恋人は個人的な情報の交換を行うようになり、このような情報を通じて互いに情緒的なサポート源として機能し始めるようになるという。また、この時期は、**PEA**（フェニールエチルアミン）による結びつきが中心であり、この状態は、覚醒状態が高まり、穏やかな幻想を抱くようになる（**Zeifman & Hazan, 2000**）。このように、お互いの情報の交換を行い、互いに情緒的なサポート源になる、つまり、お互いがアタッチメント人物となるまでの間、足りない情報を埋めるために内的作業モデルに依拠した認知を行っているのではないかと考えられる。

交際中期（本研究の第2、第3段階である交際期間 6ヶ月から23ヶ月）では、予測通り、恋人の応答性の認知に関して、アタッチメントスタイルの違いは認められなかった。交際初期において、恋人同士が様々な情報交換を行う中で、自分の持っている内的作業モデルと合致しないことが多々起こりうる。そういった場合、内的作業モデルに依拠した対人認知よりも実際の情報に基づいた対人認知を行う方が適応的であると考えられる。すなわち、この時期は、対人認知において、内的作業モデルが修正される時期であると考えられる。この段階は、**Zeifman & Hazan (2000)** が“明確なアタッチメント”と定義した段階であり、この段階の終わりには、恋人がアタッチメント人物になり、**PEA** の作用による高揚的感情状態から穏やかで安らぎのある感情状態に移行

すると考えられている。この状態では、先述したような幻想状態はなくなり、現実在即した対人認知になると考えられる。さらに、この段階の始まりでは、まだアタッチメント関係の形成が成立していないため、関係が崩壊しても、軽い悲しみや抑うつは経験しても、日常機能の深刻な崩壊を経験するというようなアタッチメント分離の際に特徴的な現象はあまり見られないが、この段階の終わりには、アタッチメント関係が成立しているため、関係の崩壊は、高い不安やパニック、身体機能の異常など、様々なアタッチメント分離の際に特徴的な現象が見られるという。これは、この段階の恋人がアタッチメント人物になるまでは、自らの内的作業モデルに合わない恋人との関係を選択的に解消させやすいということを示唆していると思われる。青年・成人期のアタッチメント文脈において、自己確証動機（Swann, 1987）や自己成就的傾向（Darley & Fazio, 1980）という作用を用いて、自らの内的作業モデルにある文脈を選択する傾向がある（金政, 2003, Tidwell ; Reis, and Shaver, 1996）。しかし、この段階では、個人の内的作業モデルに合わない場合、自己確証動機や自己成就的傾向に合わないために、関係を解消させることは比較的容易であると考えられる。

2年以上交際を継続しているカップルでは、予測通り、恋人の応答性の認知に関して、アタッチメントスタイルの違いが認められた。安定型の人、不安定型（回避型とアンビバレント型）の人より、恋人の応答性をポジティブに認知していた。この結果には、2つのプロセスが考えられる。1つは、交際中期に行わなかった内的作業モデルによる対人認知を再び行ったということである。Hazan & Zeifman（1994）は、それまでの段階では、アタッチメントを定義する際の4つのアタッチメント行動の対象に親がなっているが、2年以上交際を継続しているカップルでは恋人がその対象となることで、2年以上交際を継続している個人は、恋人がアタッチメント人物になっていることを示した。この段階は、Zeifman & Hazan（2000）が定義した“目的修正的パートナーシップ”の段階に相当するが、この段階では、見つめ合いや身体的接触の頻度や長さは極端に減り、会話の内容は、自分の話題や相手の話題、関係の話

題ではなく、関係以外の話題が中心となると言う。そのため、現在の恋人に関する情報は減り、不明瞭になる。この不明瞭な恋人に関する情報を埋めるために、個人はそれまで持っていた内的作業モデルに応じた認知を再度行うようになるのではないかと考えられる。2つめは、内的作業モデルを修正したというプロセスである。それ以前の段階で、個人の内的作業モデルと恋人の応答性との間に不一致が生じた場合、自分のモデルを変化させることで、環境に適応させていた可能性も考えられる（岡島，2010）。そして、恋人がアタッチメント人物となった段階では、その修正された内的作業モデルに依拠して恋人の認知を行っているということである。これらの2つのプロセスによって、本研究では、アタッチメントスタイルとアタッチメント人物となった恋人の応答性の認知との間に関連が強く生じたのではないと思われる。

上述のように、本研究では、交際期間によって、アタッチメントスタイルと恋人の応答性の認知との関連に違いがあることが示された。交際初期には恋人に対する情報が少ないため内的作業モデルに依拠した対人認知を行うが、交際中期にはいと現実在即した認知を行うようになる。さらに、個人が交際を深め、交際期間が2年を過ぎると、再度、内的作業モデルに依拠した対人認知を行うようになる。この現象が生じる理由として、2つのプロセスが示唆された。1つは、交際期間が2年経つまでに自分の内的作業モデルと恋人に関する認知に不一致はないが、交際期間が2年を過ぎると恋人への注意や恋人に関する情報がなくなってくることによる情報の不足を埋めるために内的作業モデルが用いられるプロセスである。2つめは、交際期間が2年経つまでに自分の内的作業モデルと恋人に関する認知に不一致が生じた場合、それまでの内的作業モデルを修正し、その内的作業モデルを用いて認知を行うプロセスである。このように、個人は常に内的作業モデルに依拠した認知を行うわけではなく、現実の情報に即した対人認知も行っているようである。このことは、これまでの成人のアタッチメント研究（特に、二者関係に焦点を当てている研究）において、その関係性（どのくらいの交際期間かということなど）を精査しなければいけないことを示唆していると思われる。そのようにすることによって、こ

れまで以上に明確な結果が導き出されると思われる。

本研究には限界もある。それは、本研究が横断研究であるということである。本研究では、研究の性質上、便宜的に交際期間を4つに分類した。そのため、実際にそれぞれの段階でいつ内的作業モデルを用いた認知を行っているかを特定するまでには至っていない。例えば、本研究では、第1段階を交際期間5ヶ月までとしたが、実際には交際期間3ヶ月までの人しか内的作業モデルを使用していないかもしれない。同様に、交際期間6ヶ月の人でも内的作業モデルを用いた認知を行っているかもしれない。このように内的作業モデルの使用・不使用の時期はいつなのか、過渡期はあるのかなど、詳細な分析を行うためには、大規模な縦断研究が必要であると思われる。

上述のような限界があるとはいえ、本研究においておおむね仮説は支持されたとと言える。今後の研究では、長期間の縦断法や日誌法を用いることで、アタッチメントスタイルと恋人の応答性の認知との関連の有無を詳細に検証することが可能になると思われる。また、交際中期において、内的作業モデルを変化させる人と、交際を終了する人がいることが示唆されたが、あくまでも推測にすぎず、今後検証する必要があるだろう。

#### 引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Bowlby, J. (1969/1982). *Attachment and loss: Vol.1. Attachment*, 2nd ed. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss: Vol.2. Separation*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and loss: Vol.3. Loss, sadness and depression*. New York: Basic Books.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.). *Attachment theory and close relationships* (pp.46-76). New York: Guilford Press.
- Darley, J. M. & Fazio, R. H. (1980). Expectancy confirmation processes arising in

- the social interaction sequence. *American Psychologist*, 35, 867–881.
- Hazan, C. & Shaver, P. R. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511–524.
- Hazan, C. & Zeifman, D. (1994). Sex and the psychological tether. In K. Bartholomew & D. Perlman (Eds.), *Advances in personal relationships*: vol.5. Attachment processes in adulthood. (pp.151–177). London: Kingsley.
- 金政祐司 (2003). 成人の愛着スタイル研究の概観と今後の展望－現在, 成人の愛着スタイル研究が内包する問題とは－. 対人社会心理学研究, 3, 73–84.
- Mikulincer, M., Florian, V., & Weller, A. (1993). Attachment styles, coping strategies, and posttraumatic psychological distress: The impact of the Gulf War in Israel. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 817–826.
- Mikulincer, M. & Shaver, P. R. (2007). Attachment in adulthood: Structure, dynamics, and change. New York: Guilford Press.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み. 心理学研究, 75, 154–159.
- 岡島泰三 (2006). 恋人の反応性認知尺度の作成. 臨床教育心理学研究, 32, 9–15.
- 岡島泰三 (2010). 青年期におけるアタッチメントスタイルの変化と恋人の応答性. 青年心理学研究, 22, 33–44.
- Simpson, J. A., Rholes, W. S., & Nelligan, J. S. (1992). Support seeking and support giving within couples in an anxiety-provoking situation: The role of attachment styles. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 434–446.
- Swann, W. B. (1987). Identity negotiation: Where two roads meet. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 1038–1051.
- Tidwell, M. O., Reis, H. T., & Shaver, P. R. (1996). Attachment, attractiveness, and social interaction: A diary study. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 729–745.
- 若尾良徳 (2004). 青年のアタッチメントスタイルと不安喚起場面における行動との関連. パーソナリティ研究, 12, 47–58.
- Zeifman, D., & Hazan, C. (2000). A process model of adult attachment formation. In W. Ickes, & S. Duck (eds.), *The social psychology of personal relationships* (pp.37–54). New York: Wiley.

——岡島泰三 大学院文学研究科研究員——

——桂田恵美子 文学部教授——